

特別講演

講演者のプロフィール

石黒 圭 (いしぐろ けい)

【略歴】

1969年大阪府生まれ。早稲田大学大学院博士後期課程修了。博士（文学）。専門は文章論・談話分析（日本語学）、作文教育・読解教育（日本語教育）で、「読む」「書く」「聞く」「話す」という四技能の言語処理過程全般の研究を行う。

1999年より一橋大学留学生センターにて16年間、留学生を対象とした日本語教育に従事。2013年一橋大学国際教育センター・言語社会研究科教授。2015年に国立国語研究所に移り、国立国語研究所教授・共同利用推進センター長、一橋大学大学院言語社会研究科連携教授（現職）。

現在、文化庁文化審議会委員、東京都教育庁「学びの基盤」プロジェクトチーム委員、光村図書出版小学校国語教科書編集委員、明治書院高等学校国語教科書編集委員、専門日本語教育学会学会誌編集委員会委員長、日本語学会大会企画運営委員会委員長を務める。

【主要業績】

- 『よくわかる文章表現の技術（全5巻）』明治書院
- 『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房
- 『語彙力を鍛える一量と質を高めるトレーニング』光文社
- 『豊かな語彙力を育てる —「言葉の感度を高める教育」へのヒント—』ココ出版
- 『大人のための言い換え力』NHK出版
- 『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究—学習者の母語から捉えた日本語理解の姿—』ひつじ書房（編著）
- 『日本語文章チェック事典』東京堂出版（編著）
- 『例解学習国語辞典』小学館（編集委員）
- 『文系研究者になる—「研究する人生」を歩むためのガイドブック—』研究社

文化によってここまで違う！

世界の日本語学習者の辞書ツール使用事情

— スマホによる語彙検索行動の適切な支援のために—

石黒 圭（国立国語研究所）

危機に立たされる辞書

私たちが言葉を学ぶために欠かせない辞書。その辞書が今、存亡の危機に晒されています。辞書がなくても、スマホやタブレットさえあれば事足りる時代が、すぐそこまで来ているからです。

昨今、カメラで撮った文章をその場で翻訳したり、異なる言語同士の会話を即座に通訳したりするリアルタイム翻訳が脚光を浴びています。たとえ外国語を一切勉強しなくても、スマホやタブレット一つあれば、世界のどこへ行ってもコミュニケーションできる時代が到来しつつあるわけです。「外国語なんて勉強しなくてもいいじゃん。だって、機械がすべて自動で翻訳してくれるんだし」と、デジタルネイティブの子どもたちに問われたとき、私たちはどう答えたらよいのでしょうか。

楽観的かもしれませんが、外国語学習の意義は今後もなくなることはないと思われます。たとえば、こんな意義が考えられそうです。

- ①機械翻訳は、最低限の情報は伝達できるが、複雑で高度な内容や細かいニュアンスは伝えにくく、情報が十分に伝わっているかどうかの確認も困難である。
- ②機械翻訳は、共感のような感情伝達に向いているとはいいがたく、相手と心からわかりあうためには身体化された言語が必要である。
- ③言語は伝達だけでなく思考の道具でもあり、母語とは異なる言語による思考の回路を持つことは、創造的思考をするさいの大きな力となる。

失われる紙の辞書

しかし、外国語学習の意義が明確になれば、辞書が必須アイテムになるかというと、そう単純ではありません。少なくとも、紙の辞書や電子辞書は淘汰されていくでしょう。事実、現在、言語学習において学習者が辞書として使っているのは、スマホをはじめとする電子的なツールが大半です。紙の辞書にたいする郷愁があり、一定のメリットを感じている世代でさえ、紙の辞書離れは進んでいます。スマホやタブレット、パソコンでインターネットの辞書を使ったほうが安価で便利だからです。

語学教育の教室で授業中に学生がスマホをいじる様子は、もはや日常的な光景です。授業中に内職をしているわけではなく、インターネット上の様々な辞書やアプリ、検索エンジン等を使って言葉を調べているのです。しかし、学生たちがどのように言葉を調べているのか、調べた結果、はたして必要な情報にたどり着けているのか、教師の目には見えません。インターネットの世界は大海原であり、スマホを使う学生は、目的地を見失って波間を漂っているだけかもしれません。とはいえ、スマホは私的な道具であり、教師という立場であっても、プライバシーへの配慮から覗きこんで操作を確かめるのは難しいのが実情です。また、語学学習者としての我が身を振り返ってみても、スマホを駆使しても必要な情報にたどり着けず、最終的にあきらめてしまうこともしばしばです。

辞書ツール使用の実態と支援

上述のような状況を踏まえ、日本語を教える教師として講演者は、スマホを使って言葉を調べる日本語学習者の検索行動の実態を把握し、適切な支援の方法を考えることは現代的で重要な課題だと思い立ち、2021年度から2022年度にかけて、日本語学習者の辞書使用をめぐる世界的な実態調査を実施しました。具体的には、日本国内の大学にくわえ、中国、韓国、台湾、ベトナム、イギリス、ドイツといった海外の大学の協力を得て、100名を超える日本語学習者を対象に、スマホを使って言葉を調べる語彙検索行動を1週間記録し、その間に語彙検索を行ったスマホ画面をすべて動画として収集する調査を行いました。

データ量が膨大であるため、実態の解明にはほど遠く、緒に就いたばかりですが、これらのデータを分析してわかってきた興味深い事実は、海外の各地域の言語的・文化的な背景により、使用しているツールや検索方法がまったく異なっていたということです。そして、こうした異なりが、当該地域の学習者の言語習得に、知らず知らずのうちに正の影響、負の影響を与えている実態が浮かびあがってきました。また、同じ地域の学習者であっても、誤った検索をしてしまったり、検索目的が達成できないまま断念してしまったりしている学習者が見受けられる一方で、多様なツールや検索対象を組み合わせ、ユニークな方法で検索を成功させている学習者が見られるという実態も明らかになりつつあります。

本講演では、こうした学習者の多様な行動を記録した動画データを実際にお見せしながら、それぞれの地域における学習者のスマホによる語彙検索行動にどのような特徴があるのかを観察していく予定です。そのうえで、学習者の検索行動の成功例と失敗例を比較しながら、教室で指導に当たる語学教師が、語彙検索行動に困難を抱える学習者とどのように関わり、支援していけるのか、その方法をご一緒に検討したいと考えています。